

# 子どもの世界に何が起きているのか

山内亮史

「小学生が大麻を吸っていた」。この原稿を書き出す時点でニュースである。通信制高校に通う兄の部屋で見つけたそうである。途切れることのない「いじめ」をめぐるいたましい自殺、そこまでやるのかと思わせる暴力、そして新しい問題として、「ドローン少年」に「ハッカー高校生」など、最近の子どもをめぐる問題は、これまで私たちが非行や少年少女問題と認識していたレベルを揺るがす、底の抜けた状況にある。

中でもやり過ぎることができず、私が教育関係者に限らず、誰彼となく考えを投げかけた問題が、寝屋川の中学一年生男女が福島除染作業員に殺害された事件であった。

午前五時の早朝、ひと気のないアーケード商店街をスマホの電源を捜して歩き回る二人の姿が監視カメラに映っていたのが最後だった。未だ面影は幼い。

一体、子どもの世界には何が起きているのだろうか。この半年に公表された統計からもう少し浮き彫りにしてみよう。

一つは、昨年（二〇一四年）一年間の不登校生徒（年間三〇日以上欠席）の数が、二年連続増加して一二万二九〇二人であった。このうち小学生は二万五八六六六人、中学生は九万七〇三六六人で、いずれも過去最高であっ

た。

二つは、小学生の校内暴力が昨年度二万一千四百八件と、過去最高を記録した。子ども間暴力が六割を占め、小一の加害児童は統計を取り始めた二〇〇六年度から約五倍に増えた。

三つは、文科省に報告されたいじめの認知件数が小学校で二万三千件と過去最多に上り、千人当たりでは一六・八%であった。

四つは、インターネットサイトで事件に巻き込まれた一八才未満の少年少女の数は今年上半年七九六人で、過去最高を記録した。

そして五つは、東日本大震災の被災三県の就学援助が六万七千人に上り、震災前より一万七千人増になった。

このほか、運動会での骨折事故について、「ムカデ競争」で昨年度四八二人が骨折という記事もあった。対極に、「学力の地域間格差縮小」というものもある。

私はこれまで、これらの子どもの問題群の因果関係を、私にとっては手慣れたいくつかのキーワードで理解できると考えてきた。例えば、個人レベルでの「仮想的自己肯定感」や「自我補償」としてのいじめ、社会レベルでの「ホテル家族化」、「郊外化」、学校文化の貧困、教育政策レベルでの生産力主義、SNSの普及、などである。しかし、これでは

惹起した問題の現象をなぞっているにすぎないことを痛感する。これらは多分、氷山の一角にすぎないであろうと思うからである。

今、マクロ的に過ぎるとお断りした上で、暫定的にグローバリズムとその反動ナショナリズムの悪しき結合の下に、子どもをとり巻く社会環境に新自由主義的政策が浸透してきた結果、貧困と格差、排除と差別が露出してきたのだといえるのではないか。

新自由主義的教育政策は、第一に、人生は他人との競争にあるとする社会観・教育観にある。第二に、競争の帰結が金銭、資産、地位として明視化される（勝ち組・負け組）。第三には、成功・失敗はすべて個人の自己選択・自己責任として説明される。このような政策基調の下で、「サブリメントを飲め」というように学力向上策が降りてくる」とすれば、親の所得格差が子どもの教育格差→意欲格差→希望格差として容易に表れてくる。現にデジタルレバイドや通塾率に表れる文化資本の格差が、階層学力を生んでいると実証されている。

子どもの六人に一人は貧困線以下に属しているという数字は、そのまま貧困家庭から抜け出せず再生産されていくことを示している。そして遂に、最新の統計では、被雇用者の四〇%以上が非正規雇用であるとのことである。これは、社会の基層である家族・地域社会を限りなく分化分解していく。「女性が輝く社会」、「一億総活躍社会」、なんと欺瞞に富んだスローガンだろうか。

へやまうち りょうじ・旭川大学学長